

2022年5月22日

救い主に遣わされて

マタイ 28 : 16~20

・はじめに

本日の礼拝は、教会創立 137 周年記念礼拝として行われます。高知教会では、1885 年 5 月 15 日に、設立されました。ですから、先週、5 月 15 日（日）が、ちょうど教会創立記念日にあたります。ですから、本来は、教会創立の日である 5 月 15 日（日）に創立記念礼拝を行うことが出来る予定でした。けれども、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、2 部制で礼拝を行っていましたが、1 週間遅らせて、今日の礼拝を教会創立 137 周年記念礼拝として行うことになりました。実は、2 年前、2020 年も、教会創立記念礼拝を 2 週間遅らせて行いました。そのように、2020 年 4 月以降、私たちは新型コロナウイルスの影響を強く受けて歩んでいます。その中ですが、こうして教会創立を記念する礼拝を献げています。

高知教会は、長い前史を経て、1885 年設立されました。そして、様々なことに向き合いながら、この高知の地で歩んできました。教会が歩んできたというよりも、歩まされた歩みという以外ない歩みであると思います。教会がこの地に立たされて、歩まされてきた深い恵みは、結局、高知教会がこの地で何を行うことができたかではなく、神様によって、高知教会がどう歩まされてきたのかに尽きていると思います。そして、「高知教会がどう歩まされてきたのか」、このことをもう一度受け止め直す、そこにこそ、教会創立を記念する意味でもあると思います。本日は、教会創立記念礼拝を共に神様にお献げすることを通して、神様が、137 年の間、私たち高知教会にどのような歩みを歩ませてくださったのか、特に、神様がどのような思いを持って、私たちの教会の歩みを始めさせてくださっているのか、そのことを受け止める時とさせていたいただきたいと思います。

・ガリラヤでの出会い

イエス様が復活されたことを伝えるルカによる福音書の箇所、イエス様は、婦人たちを通して、弟子たちに一つの言葉を届けておられました。それは、「わたしの兄弟たちにガリラヤに行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる」と。この言葉は、考えてみれば、大変不思議な言葉だと思えます。イエス様が十字架にかけられて、葬られたのは、エルサレムです。復活されたのも、エルサレムです。そのエルサレムからかなり離れたユダヤの辺境のガリラヤで、弟子たちに会うと約束されたのです。この時、多くの弟子たちがエルサレムのいたわけですから、もしすぐに会うと

いうことであれば、エルサレムで会うということの方が自然だと思います。ところが、イエス様はそうされずに、ガリラヤで会うことになる、弟子たちにお伝えになったのです。それは、どういうことなのでしょう。

イエス様が弟子たちにガリラヤに行かせようとしているのは、このガリラヤで、とても重要なことがあったからなのです。それは、弟子たちがイエス様に出会い、弟子として歩む招き、召しを受けた、そのような場所だったからなのです。つまり、復活されたイエス様は、明確な目的を持って、再び弟子たちに会おうとしておられるのです。それは、弟子たちをもう一度弟子として召していく、そのためなのです。そのためこそ、ガリラヤで再び会うということなのです。つまり、ガリラヤで会うことは、弟子たちをもう一度弟子として招く、召す、そのようなイエス様の御意思が示されているのです。

今、もう一度弟子として召すと言いました。その時、一旦彼らのイエス様の弟子としての歩みは終了していたと思われたのです。イエス様が十字架に向かわれる道筋で、弟子たちは一体どういう歩みを歩んだのでしょうか。その姿が、聖書には率直に残されています。最後の晩餐の場で、イエス様が「あなたがたの内の一人が私を裏切ろうとしている」と言われた時に、実際に裏切ったユダだけではなく、全ての弟子たちが動揺したのです。つまり、全ての弟子たちが、自分は裏切るかもしれないという思いを抱えていたのです。そして、事実、イエス様が捕らえられた時に、イエス様を見捨てて、全ての弟子たちが逃げたのです。唯一裁判の成り行きを見ようとしていたペトロも、その場に居合わせた人たちに問い詰められて、とうとう三度イエス様のことを知らないということになりました。最後は、「神に誓って知らない」とまで、言い切ってしまうことになりました。こういう姿が、イエス様が十字架に向かって進む道筋での弟子たちの姿だったのです。

師であるイエス様を裏切った、それも、見捨てるようにして裏切ったのです。弟子としての歩む道は完全に閉ざされていると思われたに違いありません。裏切ったわけですから、イエス様からは、「もう二度と会わない、お前など破門だ」と言われても仕方がない、そういう状態の中に弟子たちはいました。再びイエス様の弟子として歩めるはずなどないと、弟子たち自身は思っていたと思います。その弟子たちに、イエス様は「ガリラヤで会う」と言われたのです。その弟子たちを、再び弟子として召すということなのです。

・弟子たちの姿

イエス様の、「ガリラヤで会う」との言葉を受けて、既に生涯を閉じているイスカリオテのユダを除く 11 人の弟子たちは、イエス様が示されていた山に登るのです。再

び召されるということは、イエス様を裏切ってしまったことを真摯に反省して、これからはちゃんとイエス様にお従いしようという決意を、弟子たちがちゃんと持っていたということでしょうか。そうして、今度はちゃんと従うことができそうだから、イエス様は弟子として再び働きをさせようということなのではないでしょうか。そうではないのです。ここに、この時の弟子たちの思いが良く分かる言葉があります。復活されたイエス様に再び出会った弟子たち、イエス様にひれ伏している弟子たちの中には、疑う者もいたのです。それが、厳然たる事実なのです。

「疑う」とは一体どういうことなのでしょう。私は、ここでの弟子たちの「疑う」には、様々な意味が込められているように思いました。勿論、イエス様の復活そのものが受け入れられないと思っている弟子も、恐らくいたと思います。しかし、私は、それ以上に弟子たちの心を占めていたのは、やはり「本当にイエス様にお会いしてよいのか」という思いだったのではないかと思います。完全に裏切った、弟子として歩む資格などどこにもない。そんな自分が、イエス様の前に立つことが本当にできるだろうか、そういう思いです。恐らく、イエス様から厳しい叱責の言葉を受けるのではないかと考えていたと思います。そういう思いを抱えながら、弟子たちはイエス様の前にひれ伏していたのです。

・イエス様の召しの姿

しかし、イエス様はその弟子たちに向かって、「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、全ての民をわたしの弟子にきなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。」と言われるのです。これは、間の説明を省いて結論だけ言えば、再び弟子として召すということです。イエス様の弟子として、神様の恵みを世に伝えていく、その働きをあなたはなしていきなさい、イエス様は召されるのです。

ここで、心に留めたいのは、11人の誰も排除されなかったということです。先ほど確認しましたように、11人の中には、疑う者もいたのです。イエス様は、疑うような者はだめだと、不安を持っている者はだめだ、その者を排除して、疑っていない者だけを弟子として再び召されたのではないのです。疑う者も含めて、11人を弟子として招かれたのです。その11人に、再び弟子としての働きを委ねておられるのです。ここに、イエス様の深い思いが示されていると、私は思いました。

ここにいる11人は、かつてガリラヤでイエス様に出会い、召されて、弟子として歩み始めました。その時、そうしてイエス様の弟子としていただくに相應しいと思うような、特別の才能があるような人たちだったのでしょくか。そうではありませんでした。むしろ、どこにでもいるような普通の人たちだったのでしょく。少なくない人たち

は漁師でした。漁師とは、当時最も一般的な仕事の一つでした。特別神様について深く学んでいるわけでもない、そういう人たちです。また、この福音書を記しているマタイは、徴税人だと言われていました。徴税人とは、神様を裏切って敵の手助けをしているというように受け止められていました。それ故に、人々から大変蔑まれるような仕事だったのです。そういう人たちが弟子として召されていたのです。

ですから、再び召されていく、その時に「疑う者がいた」ということは、本当はあってはならないということが起こってしまっているということではないのです。最初に、ガリラヤでイエス様に弟子として召されていった時と同じように、再び召されるこの時にも、召される人間の側の状態を一切問わないというイエス様の御意思が明確に示されているのです。そして、疑っている者も含めて、イエス様は弟子として召していられるのです。そうして、弟子たちはイエス様にあって、歩まされていくのです。

・教会への召し

「全ての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。」、この言葉は、イエス様による宣教命令なのです。イエス様御自身が言っておられるという意味で、「大宣教命令」と言われています。これは、その時の弟子たちに向かってという意味ではありません。以前もお話したことがあると思いますが、この弟子たちの群れこそが教会の原型なのです。それ故に、この言葉は、そのまま、教会に向かってイエス様が与えておられる命令の言葉だと言ってよいと思います。このイエス様の命令を、今も教会に与えられているのです。そして、私たち高知教会も、この言葉を与えられているのです。

今、いろいろな場で、「このイエス様の宣教の命令にお応えできているのか考えなければならぬ」という言葉も、よく聞きます。確かに、このイエス様の言葉の前に立って、私たちの姿勢を反省することも求められているかもしれませんが、それは決して間違いではないと思います。私たちがこのイエス様のお言葉に十分お応えできているだろうか、そのことを考えなければならぬのではないかと思います。しかし、今日、この御言葉の前に改めて立つ時に、イエス様は、私たちに反省を促すという思いで、この言葉を言われたのだらうかと思えます。まず、イエス様がこの言葉をどんな思いで言われたのか、深く受け止める必要があるように思いました。

イエス様は、単に弟子たちを「これから頑張って伝道しなければならない」と、鼓舞するような思いで言っておられるのでしょうか。そうではないのです、ここに疑う者を抱えている弟子たちです。そのような群れに対して、語り掛けておられるのです。いやむしろ、そういう弱さを抱えている群れに、思いもしない道を歩ませようとして

おられるのです。それは、イエス様が共に歩んでくださることを、本当の意味で経験していく道なのです。

イエス様は、ただ全ての人に福音を伝えよと命じておられるわけではありません。そう命じておられるイエス様は、大切な約束を弟子たちに、教会に、与えてくださっています。それは「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」との約束です。ですから、弟子たちは、教会は、伝道の働きを担っていく中で、このイエス様の約束の言葉がどんなに確かであるのか、受け止めていくことになるということです。

ここで「いつも」と言われています。これは、漠然とした「全ての時」ということではありません。これは、聖書の書かれている元の言葉に遡りますと、「一日一日」というような言い方になっています。更に、「共にいる」という言葉も、これから先共にいるというよりも、今この時既に共にいてこれから先もずっと共にいる、そういうような言い方を、イエス様はしておられるのです。つまり、イエス様は漠然と「共にいる」と言われたではありません。疑ったり不安になったりしているあなたと、今確かに共にいる、そして、それと同じように、あなたが歩むこれからの一日一日もまた共にいると、約束されているのです。その恵みの中に、弟子たちは、教会は、そして、私たちは歩んで行くのです。

・恵みの道を生きる

何度も読んできて、十分に分かっていると思っていたこの箇所ですが、改めて説教の準備をしながら、とても思わされたことがありました。それは、「イエス様が共にいてくださる」という真実を、私たちはどのようにして知っていくのかということです。「イエス様が共にいてくださる」という恵みは、言葉として理解するということとは、少し違っているのです。実際に信仰の道を歩む中で、経験させられていくのではないかということです。

例えて言えば、私たちは今空気の中に生きています。空気がなければ生きていくことができません。しかし、そのことはあまりにも当たり前になっていますから、特に「今空気の中に生きている」と考えることはないかもしれません。それと同じよう、イエス様が私たちと共にいてくださるということも、極めて日常のことですから、それほど深く考えることもないのかもしれません。しかし、一旦空気を失うような状況になったら、空気があることがどんなに大きな意味を持っているのか改めて認識させられるように、ある出来事に出会って、やはり「わたしはあなたがたと共にいる」というイエス様の約束の言葉がどんなに重い意味を持っていたのか、気づかされることがあると思います。

教会は、そのことを伝道の働きを担うことを通して、受け止めさせられます。「だか

ら、全ての民をわたしの弟子にきなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を受け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。」、教会は、新しい神の民を加えられていく中で、このことを深く受け止めさせられるのだと思います。私は、5月8日（日）に、佐川教会の奉仕をしました。その礼拝では洗礼式も行われました。洗礼を受けられたのは、80歳代の婦人の方ですが、私が佐川教会の代務者の時に礼拝に出席されるようになり、その後ずっと礼拝生活を送られ、洗礼に至ったということです。そして、この洗礼式は、その方にとって喜びというだけではなく、教会にとっても大きな喜びでした。佐川教会での洗礼式は、実に20数年ぶりとお聞きしました。礼拝の中で、「洗礼式を通して、この教会に春が来た」と、ある長老が祈られました。皆がそのような思いだったと思います。佐川教会が努力をして得た結果だとはとても言うことができない、神様が働いてくださったという以外ないという思いだったと思います。そうして、神様が生きて働いてくださったことを、教会全体で実感させられたのです。

私も、代務者の時代に、この方と共に礼拝を献げさせていただいたので本当に大きな喜びだったのですが、実は、単純な喜びではありませんでした。その方は、教会員のお姉さまだったのですが、当初弟さんも「どれほど信仰のことが分かっているか分かりません」と言っておられました。私も、正直同じような受け止め方でした。ところが、ずっと礼拝に通い続けられました。そのうち、「夜お祈りして寝ることが私の日課です」とか、「礼拝の聖書箇所を、毎週何度も読んで礼拝に来ています」というような言葉をお聞きして、驚かされることがありました。そして、数か月前、堤先生から「〇〇さんが洗礼を受けることを希望されています。洗礼式の司式をお願いします。」と言われた時に、本当にうれしい気持ちと共に、神様の働きの偉大さに、改め驚かされるような思いでした。神様の働きの大きさを、やはり自分は分かっていたなあと思われました。「主があなたがたのために戦われる、あなたがたは静かにしていなさい」、絶体絶命の場所で、モーセを通して、神様が示されたことです。改めて、神様が生きて働いてくださっている、その恵みを深く受け止めさせられたのです。私自身、本当に感謝という以外ない時でした

「疑う者もいた」、福音書を記したマタイは、どうしてこの生々しい言葉を残しているのでしょうか。恐らく、弟子たちは「自分たちが疑っていた」と話したからだと思います。そして、恐らくマタイ自身も、疑いの中にいたのだと思います。しかしなぜ、そのような姿を率直に記しているのでしょうか。それは、疑っていた自分が、思いもしない恵みの世界を見せていただいた、そのことを感謝を持って受け止めているからなのです。「疑い」、それはあってはならないものではないのです。疑っている者が神

様の大きい御業を見させられて、その疑いを乗り越えさせていただき、その道を歩ませようと、イエス様は強く願っておられるのです。

私たちは、「主が共にいてくださる」という言葉は、言葉として良く分かっていると思っています。しかし、この言葉の恵みの大きさを、本当には分かっていないのかもしれないかもしれません。イエス様は、その私たちに信仰の道を歩めと命じてくださっています。そうして、その一日一日をイエス様が共にいて支えてくださるのです。そこで出会う一つ一つのことを通して、主が共にいてくださることはこんなに大きな恵みであったのか、改めて知らされていくのです。そうして、日々と積み重ね、高知教会は137年歩んできました。これからもそうです。教会の歩みを進める中で、大きな御業に出合わせていただくのです。そのことを通して、イエス様が共に歩んでくださっている恵みを新しく味わいながら、これからも歩み続けていくのです。